

## 山口弥一郎の地理学

### 一

地理学の制度化<sup>(1)</sup>という概念との関連で、日本の近代地理学の歩みを検討するのの際して、高等教育機関におけるアカデミー地理学の成立後とそれ以前の歴史とを区分するのが一般的になっているし、さらにアカデミー地理学内においても正統派、あるいはゲートキーパーやマネージャーと異端、あるいはアウトサイダーとの区別もなされている。<sup>(2)</sup>ところが、ここで取り上げる山口弥一郎<sup>(3)</sup>はこのような図式的な分類にはなじまない存在である。会津に一九〇二年に生まれたという年齢から見ればアカデミー地理学成立後の世代に属するが、中学を出ただけで小学校の教員になり、一九二八年に文検として知られ

### 竹内啓一

ていた文部省中等学校教員資格検定試験地理科に合格した。この文検は、中等教育の教員が、大学及び高等師範学校出身者だけでは不足したために一八七五年から一九四三年まで実施されていたもので、中等学校または師範学校卒業者に、中等学校の教員という意味での専門家の資格を与えるものであった。<sup>(4)</sup>

地理学に関しては、文検合格者のなかには研究活動を活発に行い、日本地理学会への入会を許され、機関誌『地理学評論』に研究成果を発表していたものもいたが、第二次大戦前の地理学界においては、本来的な地理学研究者とはみなされていなかった。一九二八年の地理学合格者は十五人、第一次応募者は約八百人であった。一九三〇年頃、文検地理をめざして勉強していた潜在的受

験者の数は千五百人を下らなかったと考えられるので、若年で合格した山口が、当時の文検の出題委員であった山崎直方・辻村太郎・内田寛一・田中啓爾など、当時の第一線のアカデミー地理学者の著作によくなじんでいたという意味で、すぐれた受験生であったことがわかる。多くの文検合格者が教育者として最終的には中等学校長というキャリアを歩んだのに対して、山口は東京などの名門校からの勧誘を断って、任地磐城にまどまって炭礦集落の研究に着手し、一九二九年より活発に論文発表を行い、一九三一年には東京地学協会に入会を許され、一九三三年には日本地理学会機関誌への論文投稿許可を得ている。<sup>(6)</sup> 最初は同郷の渡辺万次郎(東北帝国大学理学部教授 地質学、地形学専攻)の指導をうけ、一九三一年以降は渡辺の紹介で地理学者田中館秀三(東北帝国大学法文学部教授)の指導をうけ、田中館を彼の死(一九五一年)まで師とあおいだ。

方法がないのに、一八九六年の津波災害後に一度移動した集落の多くが元の場所に戻ってきてしまえば繰り返した害に遭っていることに注目した。山口自身の回想によると、「なぜ戻ってきてしまふかは、地理学ではもはや解けない」と考え、民俗学的資料の基礎調査(方法論)になじむようになり、一九三五年以降は柳田国男の指導を受けるようになったことである。<sup>(8)</sup> それ以外の理由としては、当時日本民俗学に強い関心を持ち柳田のもとに出入りしていた東大出身の俊秀地理学者佐々木彦一郎・山口貞夫と田中館を通じて接触するようになっていたこと、および常磐炭田を研究するなかで、民俗学的資料に触れない限り住民の郷土意識を理解することができないと考えるようになっていたこと<sup>(9)</sup>も考慮されなければならない。いずれにせよ一九三五年に山口ははじめて柳田に会い、以後山口は、柳田をも師としてあおぎ、女学校・中学校で教鞭を取りつつ、炭礦集落、津波災害、凶作などに関する地理学の論文を発表するとともに、民俗誌資料、民間伝承などを採取し、民俗学関係の雑誌に発表し続けたのであった。他方柳田の側では、柳田が日本中に張り巡らしていたインフォーマントのネットワークの一

員、東北をすみずみまでよく歩いて、そこをよく知って

いる人間としての価値を山口に見出し、彼を重視したと言

えるかもしれない。しかしながら、山口の回想によれば、柳田の決定的影響は、彼に「災害を防止するため、

一人でも多くの人命を救うために研究をしているのであ

れば、三陸の人々にわかるような本を書かなければ駄目

だ、通俗本を書いたって学門の価値は下がりはない」と

言われたことで、これにこたえようとして書かれたのが『津波と村』であつた。<sup>(10)</sup>当時の彼は、明示的にはそう

考えていなかったであろうが、人々が日常生活のなかで

自然をどのように認識しているのか、郷土に対する帰属

意識をどのようにはぐくんでいるのかということを知ら

ない限り、郷土の人々の生活の改善に資する研究になら

ないということ、なかば本能的に感じていた。このよ

うな観点からすれば、一九三三年、三四年の凶作を契機

にしてなされた東北の焼畑慣行や稗栽培<sup>(11)</sup>に関する研究も

同じ動機によるものであつた。第二次世界大戦前の山口

の地理学は、アカデミーで制度化された地理学が、その

存在理由を主張するためには、「地域」や「環境」の概

念を神話化さえする必要があつたのとは無縁のところ

あつたのである。

## 二

「人間・自然」関係を支配的パラダイムにするとい

のであれば、日本の近代地理学は、一九世紀後半に西洋

近代地理学が内村鑑三や志賀重昂によって紹介された

きから、今世紀初頭のアカデミー地理学の成立を経て、

一九六〇年代まで、常にそうであつた。第二次世界大戦

後も、絶えず環境論を意識する、しばしば環境論に対す

る不毛な理論的批判に明け暮れていたという意味では事

態は変わらなかつた。実証主義的な研究における経済決

定論あるいは歴史学主義も、反環境論というコンテクス

トのなかで主張されたのであつた。一九六〇年代末から

一九七〇年代にかけて、環境問題が大きな、そしてグロ

ーバルな規模での社会的問題になったとき、日本の地理

学は社会的実践への有効性を示すことがほとんどなかつ

た。すなわち、「人間・自然」関係の研究が、制度化さ

れた地理学になんらの存在理由をも与えないことが明ら

かになった時点で、日本の地理学の理論的混迷と制度的

地理学の復権のための知的かつ実践的な営為はさまざまなどころでなされているが、いま日本における地理思想史研究の立場からなされなければならないのは、文化と自然、社会と環境、生活と土地というテーマが、アカデミー地理学者たちの教育、研究制度の枠組みのなかでのストラテジーとしてではなく、人々が生活のなかで、場所、環境、自然、風景などについてもつ感受性(郷土意識あるいは地理的イマジネーションと呼んでもよい)に注目するといふかたちで、日本においてどのように提起されてきたかといふことをあとづけることである。それは研究者の営為を、社会的コンテクストに注目しながら再構築するという意味では、地理的知識の歴史地理学である。

地理学のこのような系譜を、アカデミー地理学成立以降の時期について見ると、夭折した山口貞夫、佐々木彦一郎、鹿野忠雄などを別にすれば、一九一五年に文検地理科に合格し、諏訪中学にあって多く、の教え子に大きな影響を与え、郷土地理あるいは風土地理の名のもとに多くの研究業績を残した三沢勝衛、<sup>(13)</sup>東京高等師範の卒業生で日本地理学会創設以来の会員であり、『帝都と近郊』

(大倉研究所 一九一八年)、『郷土地理研究』(古今書院 一九三〇年)などの名著を残し、一九〇二年以降、十数年間にわたって農学者新渡戸稲造の自宅で開催されていた研究会、郷土会に出席し、柳田国男とも接触のあった小田内通敏、<sup>(14)</sup>フランス地理学の影響を受けつつ「社会生活の生態学」を主張した小寺廉吉など多くの名前をあげることができ、<sup>(15)</sup>現役の地理学者としても、一九三九年東京高等師範学校の学生だった頃から柳田に師事した千葉徳爾、<sup>(16)</sup>東大の学生時代からアチックコミュニゼラム(後の常民文化研究所)に出入りしていた小川徹などがあげられよう。山口はこれらの地理学者の系譜に属することはたしかであるが、彼の学風および生き方はかなり独自である。第二次大戦後の只見川開発による水没村の調査を通じて親しくなった同じ東北出身の小田内<sup>(17)</sup>以外とは、<sup>(18)</sup>研究面でも個人的にもこれらの地理学者との交流はほとんどなかったようである。

### 三

山口の地理学の基礎に郷土意識があり、同時に彼の地理学の主題は、人々の郷土意識形成のメカニズムの解明

であり、さらに研究の目的は人々の郷土意識形成に資することであった。すでに述べたこのことをパラフレイズすると、以下のような、山口の地理学のいくつかの特色、問題点が指摘されることになる。

文檢合格後、一九六三年に亜細亜大学で教鞭をとるようになるまで、山口の著作のほとんどは東北を対象にしたものであった。その後の大学の講義との関連で書かれた地理学の概説書においても、彼がフィールドにした東北の事例が多くあげられている。<sup>(20)</sup>しかし山口の長年にわたる東北研究は、単なる事実の報告、その資料的価値によって学界から評価されたのではない。既に指摘したように、山口の東北における調査研究は常に災害や凶作といった人々の生活体験を動機にしていたが、同時に彼には諸現象の東北的あるいはより小さなスケールでの地域的特色を明らかにしようという強い問題意識があった。ずっと後になって彼は、かなり強引な自己正当化を試みて、「私の東北地方の研究は、結局は庶民の物心両面の安定・平和な生活を祈求することであったかとも思う。それには実体を極めなくてはならないが、その固有性がわからないのでは困る<sup>(21)</sup>」と述べているが、「固有性」の

追求は、実践的な要請に由来していたよりもむしろ、比較地誌的視点を重視した田中館および重出立証法を主張した柳田の感化によるものと考えられる。そして山口自身、中央の研究者の文献に目を通し、また彼らと直接接触を持つことによって、郷土を相対視する観点を持ち続けたからこそ、たとえば胆沢川扇状地の散居の起源を「わせた」を住居の近くに配置する必要という、礪波や大井川扇状地とは異なる寒冷地の独自性に求めた場合<sup>(22)</sup>のように、彼の著作が価値を持ち続けたのであろう。

山口の地理学が郷土意識に根ざしていたというのは、単に、彼の東北研究が東北人としての彼によってなされていたというような生易しいことを意味するのではない。文檢合格後磐城にとどまったのは、既に述べたように炭礦集落研究のためであったが、一九四〇年岩手県立黒沢尻中学に転じてからは、北上山地の水押部落を彼のいう寄寓採録地に定め、週末にはそこに泊まり込んで民俗資料の採集につとめた。旅人の短期間の寄寓では、言語文化、心意現象の採録はできないという彼の信念は、日本民俗学に由来するものであるが、これは、いわば旅の学問が主流であった日本の地理学にあって、参与観察、参

与調査が実践されたまれな事例である。凶作、稗の役割などに関する一九四〇年代前半の彼の研究は、景観の分類や物産の羅列以上の、人々の地理的イマジネーションに対する洞察によって裏打ちされていたのであった。

一九四五年、江刺郡岩谷堂高女の教頭になってからは、稲瀬村の農家に住みついて敗戦直前の物資不足、配給制、供出制のもとでの農村の姿を採録し、さらに戦後は、公職をすべて辞して二年間会津に帰郷して農業に従事し、農事のみでなく長男相続人として直面した家族・親族間の葛藤をも記録した<sup>(24)</sup>。しかし印刷になったこれら二つの記録、とくに帰郷の記録は山口自身が傷を負った生活<sup>(25)</sup>の記録であったわけで、これはもはや日本民俗学の推賞する寄寓採録、あるいは社会学者や人類学者のいう参与観察などではない。山口にとってはたしかに、「帰郷、帰農の生活をしてみて、これ程にまで農村生活、郷土人の意識を知らな過ぎたかを反省してみなければならなかった<sup>(26)</sup>」のであって、彼にとっては貴重な体験であったろうし、その後の彼の会津民俗誌研究に新しい視点を加えることになったであろうが、彼の体験を、一般的にとられるべき研究法として普遍化することはできない。また彼

自身、その後の『東北民俗誌・会津編』やいくつかの市町村史をまとめる仕事は会津民俗研究会などの共同調査によっている。一九四〇年から一九四八年までの彼の寄寓採録および帰郷採録経験は、民俗資料の採録者と利用者との上下関係をともなう分業関係がかかえる矛盾、参与観察者は究極的には生活者たりえず、参与観察者が生活者になってしまえばもはや研究者たりえないというパラドックスを、彼に痛感させるものであったはずであるが、彼はこの矛盾、あるいは方法論上の限界を認識していなかった。帰郷採録を選集に収録する際に際して、彼は「私の悲壮なまでの学者としての賭がかかっているようにでならない」、「柳田師匠の教えを追いつめた郷土人の帰郷による心意現象の採録が、果して遂げられているかの、成果の賭がかかっている思いである<sup>(28)</sup>」と述べている。これは挫折を知らない山口の研究スタイルの敬服すべきたくましさであり、同時に、東京に居を移してからは、奉職した亜細亜大学、創価大学で与えられた役割を果たしつつ、東南アジア、シルクロードへと研究の対象を精力的に拡大させながら、「日本文化の源流を求めるところは、日本の固有文化を多く持つと思われる、東北地方の

特性・固有性を解くことにほからなかった<sup>(29)</sup>という奇妙な三段論法を展開してはばからない方法論的無反省にも通じるのである。精力的にフィールドノートはとり続けたが、旅の学問に徹することにより、山口の地理学は郷土意識から遊離し、経世済民の学という個性を失ったのであった。むしろ、ここで注目しなければならぬのは、彼の地理学の出発点であった東北研究へのこだわり、執念であろう。

#### 四

山口のシルクロード研究、世界文化構成論<sup>(30)</sup>は、それ自体は壮大な文明的、地政学的な展望をもち、さらに仏教伝播と高塔信仰に着目するなど、示唆に富んではいるが、さきに指摘したように、それまでの山口の地理学研究とはかなり異質なものであり、そこに連続関係を見いだすのは無理である。これを別にする、山口の地理学研究は、① 炭礦集落、② 三陸海岸の津波防災、③ 東北の凶作と開拓、④ 東北の地方都市、⑤ 村落の形態と構造、に大分されよう。柳田の示唆のもとに開始された地名研究があるが、山口は、小地名を開拓事情およ

び居宅の占居状況との関連で研究している、これは③に含めることができる<sup>(31)</sup>。焼畑および稗に関する研究も、山口の地理学のなかで重要な位置をしめるが、すでに指摘したようにこれらの研究は凶作を研究の動機にしていたので、これらも③の系統の研究であると考えられる。名子制度の研究も山口の地理学における重要な位置をしめ、一九五七年の国際地理学連合(IGU)の日本における地域会議でも山口はこのテーマで報告要旨を提出しているが、山口の名子制度に対する関心は、主として村落の社会構造に発するものであるから、この研究は⑤に属すると考えられる。

①の研究はもっとも初期のものであり、「人間・自然」関係パラダイムに依拠しているとはいえず、炭礦集落の移動、人工支持力に自然の影響をみたにすぎない。柳田に「こんなものは民俗誌ではない」と一蹴されたという炭礦民俗誌<sup>(33)</sup>の方が、現時点では、①に属する研究のなかでは、先駆的な歴史地理学研究として高く評価されるとともに、消滅した風景の記録としても貴重である。

②および③は、すでに指摘したように、山口地理学の特色が遺憾なく發揮された研究分野であり、②について

は博士論文「津波常習地三陸海岸地域の集落移動——津波災害防禦対策実施状態の地理学的検討」——をまとめ、一九五九年に、東京文理科大学から理学博士の学位を得ている。すでに言及した一九四三年の著書『津波と村』とこの博士論文を比較してみると、おなじ主題を扱いつながら、内容、観点に大きな違いがあることがわかる。『津波と村』では、広範な読者層を対象にして、各地の村の事例をいきいきと描きながら、「……惨害記録と哀話のみを綴っているべきではない。暗い話でなく、根強く再興していく日本人の力をこそ、次には被害を少しでも軽減するために、細心の注意を怠らぬように導いていくのが我々のなすべき事と信じている」と、著者の実践的意図が明示されているのに対して、博士論文では、まず研究の目的として、「集落の地理学的研究は、集落の成立、発達、その分布と、集落そのものの形態、構成、機能が、地理的環境と如何に結びついているかを解明するのが主目的である。……津波常習地の集落移動の地理的研究を、これらの集落地理学の基礎的問題を解くためと、防災という貴重な使命を以て果したいと思う」ということが述べられ、具体的な防災策の提示は課題とされ

ていない。博士論文の内容で大きな割合をしめるのは、湾形など自然条件と集落移動の類型との関連の分析であり、結論で言われているのは、「……本研究は、三陸海岸の地域的特性を明らかにすると共に、漁村の特性が集落移動に如何なる制約性をもつかを解き、集落地理学の若干の基礎的事実を、災害による集落移動によって実証、解明したことになる」ということである。漁村で生活する人々が場所に対してもアイデンティティ、郷土意識の解明は背景に追いやられ、制度の中央にあるアカデミー地理学者が設定する集落地理学の環境論的枠組みのなかで、周辺の地理学研究者の個別研究は基礎的事実を提供するという役割分担が見事に示されている。山口が、おそらくはもっとも主張したかったであろうことは、「又集落研究は、形態、機能の分析的研究に止まらず、人間生活の唯物的、唯心的両面の総合的研究が基礎にならなければ解けないことを明らかにし得たかと思う」と付言されているにすぎない。

博士論文の内容の構成、観点の設定、方法論などに關して、審査の主査をつとめた青野壽郎がどのような指導をしたのか、そして山口の側から、どの程度まで自分の

研究を青野の研究スタイル、方法論の枠に適合させようとして博士論文を書いたのかは知りようがない。集落の成立、発達、分布、形態、構成、機能を、地理的環境との関係で分析するというのは、とくに青野にかぎられない、一九五〇年代の日本のアカデミー地理学の多数をしいめた正統派の方法論であったから、在野の研究者であったからこそ、アカデミー正統派の研究動向に敏感であった山口が、博士論文を、そのような支配的パラダイムに依拠させて書こうとしたことは十分に考えられることである。むしろ、青野が、若い頃、自転車と徒歩で日本中の漁村を調査し、漁村社会の状況をよく知っていた地理学者<sup>(36)</sup>であったから、論文の題名および研究目的として、副次的なもの、具体性を欠くものではあるが防災という言葉が用いられ、結論部で、上に引用したような付言を書くことが許されたと考えるべきであろう。しかし山口が、集落移動の限界を説得的に示し、防災に役立つ内容にしようとすれば、彼がすでにもっていた民俗誌資料や史料を積極的に示さなければならなかったであろうし、それが青野の講座の学風になじまなかったであろうことこそが問題なのである。

このようにして、山口の学問の検討は、日本の近代地理学の伝統のなかで、アカデミーの正統とは違うところに、文化と自然、社会と環境、土地と生活の相互作用、人々の地理的イマジネーションに注目しながら考察する研究がなされていたこと、そしてそのような研究の営為が、制度、社会、学界のコンテクストのなかでいかに多くの困難に直面し、制約をこうむっていたかということを見せてくれる。学問の世界にあって、ラディカルであり続けるということは、現在、山口が生きたのとは異なったコンテクストのなかで苦闘する第二、第三の山口の研究の営為から謙虚に学び、彼らと連帯することであろう。

- (1) Capel, H. *Institucionalización de la geografía y estrategias de la comunidad científica de los geografos* (1977).
- (2) Geo-Critica, Barcelona 1977.
- (3) Takeuchi K. *Two Outsiders: An Aspect of Modern Academic Geography in Japan*. K. Takeuchi (ed.), *Languages, Paradigms and Schools in Geography: Japanese Contributions to the History of Geographical Thought* (2). Laboratory of Social Geography.

Hioisubashi University, 1984. Tanabé, H. La géographie japonaise et sa contribution possible. *Espace Géographique* 9, 1980 も異端と正統の区別をしているが、その観点は竹内とは異なる。

(3) ここで主として依拠した山口弥一郎の著作は、以下の選集及び選集発行後に発行された六冊の単行本であって、すべての著作を網羅するものではない。

『山口弥一郎選集』第一巻―第十二巻 世界文庫 一九七二―一八〇年

『山口弥一郎選集』別巻一 文化書房博文社 一九八〇年

『体験と民俗学』文化書房博文社 一九八四年

『体験と地理学』文化書房博文社 一九八五年

『東北地方研究の再検討・天の巻』文化書房博文社 一九九一年(一)

『東北地方研究の再検討・地の巻』文化書房博文社 一九九一年(二)

『東北地方研究の再検討・人の巻』文化書房博文社 一九九二年

『郷土研究より世界文化構成論への筋道―一九〇歳の提言』文化書房博文社 一九九三年

本稿は山口弥一郎の著作の書誌学的検討をするのが目的ではないが、山口自身何回か自分の著作目録を作成しているが、いずれも不完全なものであり、また、選集刊行後発行された著書にも、選集に収録されたものとの内容の重複

があって、山口の著作の検討にはかなりの注意が必要である。また、選集第十二巻および一九九一年(一)に著作年表があるが、選集は写真製版によるもので、初出の雑誌名、題名等不明の著作がいくつかあり、総索引や網羅的な著作目録はない。あるいは未刊の選集の別巻二がこれらにあてられるのかもしれない。

選集及び以上の六つの著作だけでは、彼が選集に収録しなかった著作、一九六五年以降のシルクロード関係、及び亜細亜大学と創価大学での講義をもとにした著作の一部が欠落することになるが、彼の主要な著作は上記の著作にすべて含まれていると考えて差し支えない。

(4) 文検については、アカデミー地理学者によっては否定的な評価が多かったが、これが日本における近代地理学の発達にとって持った大きな意味を最初に指摘したのは中川浩一である。(『地理学の興隆と文検制度』『日本地理学会一九七六年度春季大会予稿集』。および『地理教育の源流』古今書院 一九七八年)文検については、佐藤由子『戦前の地理教育―文検地理を探る』古今書院 一九八八年が合格者へのインタビューをもふまえてくわしい。

(5) 佐藤由子は前掲書(一九八八年)において、一九三〇年に会員がわずか七〇名であった日本地理学会の機関誌『地理学評論』が千部以上発行されていたことから、文検受験予備軍を少なくみても二千から三千と推定しているが、学会誌は、図書館や研究機関、すでに中等学校の教職にあった個人などによっても購入されていたはずであるし、受

験者数からみてもこの推定は過大であると考えられる。なお、ここで問題にしているのは試験検定であって、無試験検定の私立大学地理科の卒業生は含まない。

(6) 一九二五年に設立された日本地理学会は、東京帝国大学および東京高等師範学校の教官および卒業生四十九名を設立会員とし、以後二校の卒業生を会員にしていたが、三沢勝衛、長井政太郎らの限られた文検合格者には『地理学評論』への投稿を許し、一九三五年以降はこれら文検合格の投稿者および京都帝国大学出身者の入会を許すようになった。多数の優れた業績をあげつつ、一九三七年に病没した三沢を別にすれば、文検出身のこれら地理学研究者の多くは、第二次大戦後、最終的には大学教師の職を得た。

(7) 竹内啓一・正井泰夫編『地理学を学ぶ』古今書院一九八六年は二人の編者が手分けして十六人のシニア地理学者に対して行ったインタヴューの記録であるが、文検出身の唯一の地理学者として、山口に対するインタヴューがなされている。民俗学に関心を持つようになった契機を竹内に聞かれて、山口はこのように答えている。

(8) 前掲山口一九九三年二三頁  
 (9) 一九三五年、『地球』二三巻に発表した「炭礦民俗誌小稿」一、二を発展させて、山口は、「炭礦民俗誌稿」「炭礦民俗誌統稿」を、一九三五年および一九三六年の『燃料協会誌』に発表し(選集第五巻に収録)、前者の抜刷を佐々木彦一郎を通じて柳田に贈ったところ、「こんなのは民俗誌ではな」と言われたとのことである(山口一九

九三年 七八―七九頁)。

(10) このことはすでに『津波と村』(恒春閣書房 一九四三年、選集 第六巻に第三篇をのぞいて収録)の序文で述べられている。

(11) 東北の焼畑に関して、山口は一九三六年以降いくつかの論文を発表しているが、成書としては『東北の焼畑慣行』恒春閣 一九四四年にまとめられた(この著書は、「東北地方の焼畑慣行」と題して、選集第三巻に収録されている)。

(12) 「東北地方の種の分布」『地理学評論』第十六巻 一九四〇年(この論文は「東北地方の種」と題して、選集第七巻に収録されている)。種については、『東北の食習』河北新報社 一九四七年(選集第七巻に収録)でも言及されている。

(13) 三沢勝衛(1885-1937)については、三澤勝衛著作集全三巻が一九七二年にみずす書房から出版されており、地理学者としての三沢については、中学時代の教え子で地理学者になった矢澤大二による確な解説が第一巻に付せられている。教育者としての三沢を再評価したものとしては、宮坂広作『風土の教育力、三澤勝衛の遺産に学ぶ』大明堂 一九九〇年がある。

(14) 小田内通敏(1875-1954)については、Takeuchi K., Strategies of Heterodox Researchers in the National Schools of Geography and their Roles in Shifting paradigms in Geography, *Organon*, Nos. 20-21, 277-286,

1984-1985で論じた。また、その他の文献として、木本力「小田内通敏の人文地理学思想の形成過程、郷土教育運動に関わるまで」『和光大学人文学部紀要』第十四巻 一九七九年、一九一—三三頁 「小田内通敏の年譜および著作目録」『和光大学人文学部紀要』第十五巻 一九八〇年一九一—二五頁がある。

(15) 日本における文化地理学の展開と民俗学の関係については、久武哲也「日本における文化地理学の展開、一八六八—一九四五」久武哲也(編)『日本における文化地理学の展開』平成二年度福武学術文化振興財団研究助成研究成果報告書 一九九一年にくわしい。本稿はこの報告書に多く負っている。

(16) 千葉徳爾(1916— )については、『千葉徳爾著作選集』全三巻 東京堂出版 一九八八年が出版されているし、前掲の久武編報告書(一九九一年)に、小口千明「千葉徳爾と文化地理学」と彼の著作目録が収録されている。

(17) 小川徹(1914— )については、前掲の久武編報告書に、宮口尙迪「小川徹先生の足跡」と彼の著作目録が収録されている。

(18) 「只見村田子倉民俗誌 —湖底に沈む村の生活記録—」は他の民俗誌とともに『東北民俗誌・会津編』富貴書房 一九五五年として刊行された(選集第二巻に収録)。当時、山口は会津高等学校に復職し、研究同人をつくって民俗資料採録を積極的に行っていた。

(19) 前掲竹内啓一・正井泰夫編 一九八六年において、山

口は第二次世界大戦後に小田内と只見川開発地域の調査旅行を一緒にする機会があり親しくなったと述べており、事実、一九四九年十月に、小田内は、当時大沼郡永井野村中学教諭であった五十嵐勇作宛の私信で、「二十日午前七時四十分若松駅につき、駅付近にて山口先生と二時間ばかり会談し」と予定を通知しており、その書きぶりから、すでに山口と入魂であることが知られる。一九四六年から四九年の間、小田内は奥会津開発地域内の調査を行い、透写印刷のものを含めて多くの記録を残している。これらの記録および当時の小田内の書簡のコピーを提供してくださった五十嵐勇作氏に、この場をかりて心から御礼を申し上げる。

第二次世界大戦後、日本地理教育学会顧問として、創刊されたばかりの『新地理』誌上の論文あるいは座談会で、従来の日本における地理学研究のありかたを根元的に批判し、日本地理学会機関誌『地理学評論』に発表される研究の主流を組織的に批判していくことを主張していた小田内には、山口は、イデオロギーおよび地理学観の上で同調することができなかったと考えられる。

(20) たとえば、『集落の構成と機能—集落地理学の基礎的研究』文化書房 一九六四年(選集第六巻に収録)は山口の名著の一つと考えられるが、はじめの概論の部分はおそらく、既に刊行されている概説書によっている。大部分をしめる各論は、彼がそれまでにした東北農村の研究のうち未発表のものをまとめたもので、族縁集落と地縁集落についての豊富な事例を提供して資料的価値が高いが、

村落地理学の体系化をめざしたのではない。

(21) 山口 一九八五年 六〇頁

(22) 「陸中膽澤扇状地における散居とその生活 (東北地方の散村に対する一考察)」『地理学評論』第十七巻 一九四一年 (この論文は選集第一巻に収録され、さらに、山口 一九八五年に若干手直しをし、また新しい文献を付け加えて再録されている。)

(23) 江刺での寄寓採録の文章は、一九四八年、民俗学研究所の懸賞論文第一回当選作品(のちの柳田賞)になったが、印刷されたのは一九七五年、選集第四巻に「江刺の農村生活」としておさめられたときである。民俗資料の採録のみでなく、疎開者の出入り、復員者の帰郷など敗戦前後の村の生活が見事に記録されている。

(24) 大学ノート八冊の膨大な記録であるとのことであるが、選集第四巻に「会津の農村生活」として発表するのの際しては、当事者のことを考慮して、家族関係、村人のことなど、相当量を削除したとの記述が、選集第四巻の「あとがき」および山口 一九九三年 九四頁にある。

(25) このことに関連して『定本柳田国男集』第十三巻 筑摩書房 一九六九年『月報』十三に、一九四九年四月三〇日付けの柳田から山口宛の以下の書簡が掲載されている。「始めて令室の永逝を承知いたし嗟歎不止候。君は強人だから定めて此悲痛を堪へられるならんも小さい子たちのごことを考へ、殊に前年黒沢尻にての対面を憶ひ致し、短い苦勞の多い生涯に対し、我々老夫婦は無限の同情を寄

せ申候。何とか出来なかつたのかと、今になっては定めての心残りならんも、なほ子たちの為に毅然として御力行下され度、切望に堪へず候。正直のところ、君の周辺には、少しく厄難が集まり過ぎるが、是とても時代なり、ここを生き抜いて新しき人生を創立するのが、やがては愛児の爲、従つて又故人の情愛の為かと存じ候。くりごとは果しなく候。」

(26) 前掲『東北民俗誌・会津編』の「序にかえて——郷土研究小論」

(27) 市町村史のうち、一九五九年発行され一九七二年に再版された『奥州会津新 鶴村誌』は選集第十六巻に収録されている。

(28) 「寄寓・帰郷採録を回顧して」選集第四巻に付せられた『月報』九 一九七五年

(29) 山口 一九八五年 三一頁

(30) この分野での注目すべき著作としては、『踏査記・シルクロードのストゥーバ』図書刊行会 一九八三年、「シルクロード伝承の特性」山口 一九八五年 二四七—二八二頁、「卒塔婆信仰の系譜」山口 一九九一年(一) 二六〇—二八四頁がある。

(31) 山口の地名研究は、『開拓と地名、地名と家名の基礎的研究』日本地名学研究所(京都) 一九五七年(選集第三巻に収録)としてまとめられている。

(32) *Proceedings of ICU Regional Conference in Japan 1957, Tokyo 1959 p. 536* に於て Geographical Distribu-

tion of "Nago" System in Japanと題する彼のペーパーのアブストラクトが掲載されているだけで、フル・テキストはない。アブストラクトから知るかぎりでは、第二次世界大戦前および戦後の名子制度の分布を考察したものである。

(33) (9) 参照

(34) 学位論文は公刊の義務があり、論文は、一九六四年から一九六六年の間、五回にわたり、『亜細亜大学諸学紀要』

および『亜細亜大学教養部紀要』に掲載され、のちに選集第六巻に収録された。

(35) 青野壽郎の漁村研究は、『漁村水産地理学研究』第一集、第二集 古今書院 一九五三年にまとめられている。彼の地理学の全貌は、『青野壽郎著作集』全八巻 古今書院 一九八四―八七年によって知ることができる。  
(一橋大学名誉教授、駒澤大学教授)